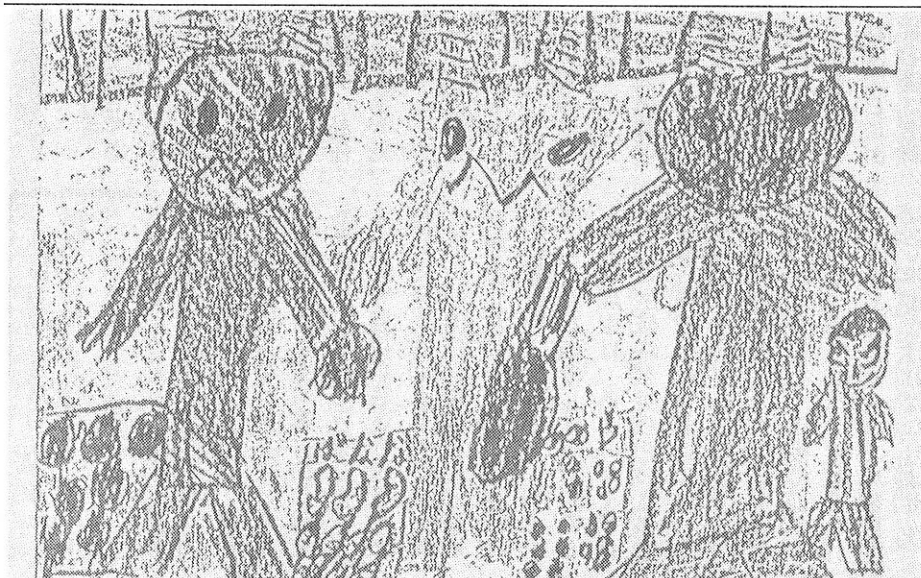


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京 3-128022
 印刷／(株)ドモン企画



オニはそと！

小学1年 おおさか いさむ

この物語は三つの福音書に記されている。その状況や言葉に多少の違いがあるが、イエスが幼な子らを祝福され、天国はこのような者の国であることを教えられたものである。

子供に祝福を受けるために、親たちはイエスの許につれてきたが、時あたかもイエスは大人たちに話をしてもらった。

子どもが出る幕じやない。実際また、邪魔であると弟子たちは考え彼らをたしなめた。

しかし、イエスは憤られたとある。イエスの表情などについて、多くを語らない聖書が、きびしい表現をする。イエスの目からすれば、子どもの祝福も大人への話も同列であつて差異はない。弟子たちには十分この点が理解できていなかった。

小さい一つの魂を限りなく追い求められる神の深い愛である。普通に言われるように、幼な子は無邪気でもなく、汚れなく罪を知らないなどということも真

「幼な子のように」とは自己謙虚の限りということである。また絶対の信頼と服従とである。叱られても、あるいは打たれても、泣きじやくりしながら、なおも親の裾にしがみついているあの姿である。

神はこの価値のない小さい者を、よしとして受け入れられ祝福されるのである。

また、小さい弟や妹が生まれると両親の愛がそちらに移ったかのように嫉妬して、弟妹に意地悪をする。寝顔が天使のようだと形容するが、誰も天使の寝顔など見たことはない。まさしく過剰なレトリック（美辞学）である。

また、小さい弟や妹が生まれると両親の愛がそちらに移ったかのように嫉妬して、弟妹に意地悪をする。寝顔が天使のようだと形容するが、誰も天使の寝顔など見たことはない。まさしく過剰なレトリック（美辞学）である。

また、小さい弟や妹が生まれると両親の愛がそちらに移ったかのように嫉妬して、弟妹に意地悪をする。寝顔が天使のようだと形容するが、誰も天使の寝顔など見たことはない。まさしく過剰なレトリック（美辞学）である。

また、小さい弟や妹が生まれると両親の愛がそちらに移ったかのように嫉妬して、弟妹に意地悪をする。寝顔が天使のようだと形容するが、誰も天使の寝顔など見たことはない。まさしく過剰なレトリック（美辞学）である。

幼な子のように (マルコ二〇章一五節)

理事長 福島 勲

新しい教会の設立

施設長 今関 公雄

分の僕を癒していただきたいとイエスに乞う。

しかし自分の家にお招きするのは恐れ多い。どうか、ただみ言を下さいと申し出る。あの絶大の信頼の姿である。

漫画家の田河水泡さんが昨年の暮になくられた。九十三才であつた。私が荻窪教会へ赴任して、第一号の洗礼者であつた。彼はこのとき五十三才。

漫画界の第一人者で、傲然ともまた尊大とも見えたかも知れないが、内実、神に対して全く頭を低く垂れて、幼な子のように福音を受け入れた。

この人のよさ、この人の尊敬する点はここにあつたと思う。洗礼を受けて「自分は一番じりでも良い、天国にいれていただきたい」と言っていた。

ご夫婦（夫人は、高見沢潤子さん）とも頼まれれば、どこの教会の伝道集会にも応援に出向かれた。

この聖句を読むと、田河さんの神への謙虚さを思い浮かべる。

私事で恐縮ですが、この一月で満四九才となりました。普段は、十才近く若く見えそうな童顔と気の若さで、自分の年齢を余り気にしないできました。しかし、今回はいささか改まった思いで年を重ねました。

その一因は、年齢相応に疲れを実感したり、白髪の出現が人生の歳月を人並の感覚に引き上げてくれたのでしょうか。しかし、最大の理由は、あと一年で半世紀の人生航路を歩むという事実を自ら確認しないわけにはいかなくなった事にありそうです。

ひと昔前には、人生五十年と言われた年齢を一年後に迎えるわけで、昨今は八十年と言われる人生としても、ゴールを見定めて歩まなければなりません。

光の子どもの家も五年の年輪を刻んで、十年一仕事の後半に入ります。これまでの礎の上に風格のあるとりくみを重ね上げたいと願っています。

何よりも、光の子どもの家に

関する全ての者にとつて、アット・ホームな暮らしを創ることが私たちの任務なのです。それには、父なる神を家長とし、頑かな魂が砕かれ、豊かに養われる神のみ言をこそ、私たちのよるべとする、神の家族が形成されなければなりません。

施設開設以来、現場の協力を得て日本聖書神学校で神学と牧会の学びを修了し、一九八九年度より日本キリスト教団の補教師となり、春日部教会の伝道師を兼務しております。

光の子どもの家の設立当初からの大きな願いの一つである、新しい教会の設立への備えを始めています。

ところで、施設と教会には、そのプロセスによって持つ関係に差異があるでしょう。

光の子どもの家の設立がキリスト者の証そのものであり、日本キリスト教団東大宮教会の養いによってまいりました。

埼玉県北東部には日本キリス

ト教団の教会がなく、教会学校や礼拝には、片道二五kmの距離を通うのは時間や経済も大変ですが、近ければ何でも良いと言ふ訳にもいきません。

社会福祉という、弱い人間が人間に関わる仕事を根底から支え、この都市化の影響をまともに受けている首都圏農村地域への伝道からも、地域教会の設立は急務と言えます。

光の子どもの家は地域の子どもとして養育していくことを願っています。地域教会へ出席するのが当然です。施設の地域化を教会でも実現することを目標にします。したがって、施設付属の教会は必要としません。

教会生活を共にする中で交流を深め、キリストの福音による一致と、愛によって働く信仰による新しい隣人関係を創りたいと切望しています。

昨年の暮から拙宅に約十名の信徒が集い、毎月一回の礼拝と祈禱の時を持ち始めました。

「二人または三人が、私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである」

エッセー
俳句にみる昭和終焉

黛 執（俳人）

昭和天皇の崩御は、日本人の全てにさまざまな思いを抱かせるものであつた。それは天皇個人の死にたいしてと言うより、天皇が象徴する昭和という時代の終焉へ対しての思いと言つたほうが当たつていよう。在位63年余の半分は過酷な戦乱と、それに続く荒廃の時代であつた。

その時代を喘ぎながら生きてきた私たちは、だれしも自分の来し方と重ね合わせて昭和を振り返らざるを得ない。

昭和史の中に自分史紅椿

東海 すず

昭和史に影をうしない土筆の中

鈴木六林男

改めて人々は昭和の中に落とし自分の影を見つめようとする。それは同時に、もう投影することなくなつた昭和への名状しがたい訣別でもあるのだ。

昭和果つ日記の上に眼鏡置く

磯貝碧蹄館

俳句はもの言わぬ文芸だから、その感慨がどのようなものであるかは説明しない。「日記」は単に一年間の自己消息ではなく、人生そのものを意味しよう。もろもろの想いの中で、作者はただ嗚呼と「眼鏡」を「置く」だけである。

昭和逝く

しまぎも凍てもなき日かな

福田甲子雄

天皇崩御の日は暖かで穏やかな松の内であつた。昭和の終焉と言うのに何という穏やかさなのであろうか、と言つた軽い驚きが込められている一句である。このことは逆説的に決して穏やかではなかつた昭和の過去を私たちに残せる。それが「しまぎも凍ても」という措辞である。「しまぎ」は雪の吹き荒れることを言い、「凍て」は凍結を言う。昭和前半はまさにこういう暗黒の時代であつた。

そこに思いを及ぼしたとき、

私たちは、その暗黒の時代を作り出した権力の頂点に天皇が燦然と輝いていたことを、もう一度思い出さなければ行かない。

天皇個人の意志であろうがなかろうが、「天皇のために」人々が血を流したことは歴とした事実なのだ。だから、広島とともに原爆の大量殺戮の犠牲にされた長崎の本島市長が「天皇に戦争責任はあると思う」と答えたのは、「殺人は罪悪である」と言うのと同じに当然である。

その本島市長が右翼の暴漢に狙撃されたことで、自民党政府は糾弾の声明を出した。だが不思議なのは、あの発言後間もなく当の自民党県連より除名処分を受けているばかりか、さまざまな迫害に遭っている。これは言論の自由へのおぞましい弾圧ではないのか。私が恐れるのは狂漢の短銃より、権力組織の中に萌芽しはじめたこういうファシズムの兆候である。

波立つて平成の世はまだ寒し

鈴木 鷹夫

戦後四〇年日本の民主化未だしの感とともに、背筋の寒くなる

の覚えるのは私ばかりではないだろう。

昨年はいろいろな俳詩でさまざまな俳人が昭和の終焉を詠ったが、私がつとも感銘を受けたのは、次の一句である。

鏡中に昭和果てたる床柱

桂 信子

一句は、自宅の鏡に写つた一本の床柱に昭和終焉の思いを重ね合わせている。作者は新興俳句から出発し、時の権力からの俳句弾圧事件など、いわば昭和の暗黒を身近かに見てきた。その作者にとつて昭和終焉への思いは複雑なものがあるに違いない。鏡に写つた床柱にふっと目をやる作者。いつもそこにあつて昭和を見続けてきた柱である。一本の床柱のたたずまいに作者は昭和が果てたことを確認する。もの言わぬ、そのしらしらとした柱の存在感が、昭和の全てを示しているよう。



虹の国から
雪

森 光子

ざつく ざつく
歩くと鳴る雪。雪はいろんなことができるし、困ることもすてきなこともあります。

今年は2回も雪が降りました。見渡すかぎり雪で真っ白な銀世界です。私は雪がなぜ降るんだらう、また、雪って何でつくるんだらうと雪を見るたびに思います。これは想像ですが、神様がこぼしてしまつた小麦粉だと思ひました。それはとても冷たい小麦粉なのです。それから小麦粉を掃除しようとするけれども、掃除機の冷たい風は、小麦粉を吸い込むだけまた吹き散らかしてしまふのです。

冷たい風で人のはだがカサカサになつてしまふし、神様は失敗続きでとほくに暮れてしまひます。そして、もつと困つたことに、朝になると雪になつた小麦粉は固いかたまりになつてしまふのです。そのおかげで、すべつて転んでけがをした人からは大きな声で文句を言われてし

まいます。なかには頭を打つてなくなつてしまつた人もいると言ふではありませんか！もう神様は、病氣になつてしまひそうに真つ青になつてしまひました。

もちろんこれは私の作り話ですが、けがをしたりなくなつた人がいたのはウソではありません。そんなニュースを聞いたときには、雪なんて！と思ひました。でも最初に雪が降つたときはとてもうれしかつたです。まさか雪が降つたくらいで人がなくなるなんて思つてもいなかつたんですよ。だから雪は恐ろしい面もあるんですね。屋根が雪の重さでつぶれたりするなんて、あの軽そうな雪が・・・

この夏に遊びに行った山ぎわさんちのある新がたの方では、四・五メートルも降ることがあるんだそうです。雪下ろしなんかはとても大変なことだそうです。二度目の雪がたくさん降つたとき、ウチの坂巻さんが家の前の道路の雪かきを三時間もか

かつてしたのだそうですが（実はこれはオーバーな言い方で、後で一緒にやつた菅原先生に聞いたのですが二時間ちよつとだつたそうです）腕や腰が痛くて一ヶ月も！大変だつたのですよ。そのときは、汗をかいて気持ちがいいなんて強がりを言つていましたかね。

さて、雪のとてもステキだと思う話ですが、白馬岳のことです。雪国にある山の名前です。

長野にあるのが有名です。白馬岳には、冬にはたくさん雪が降つて真っ白になります。それは、このあいだの雪なんてじやなくて大変なのです。何しろ雪国の、それも奥深い山の中のことですから何メートルかわかりません。いくら掘つても雪です。坂巻さんの腕が折れるほど、かいてもかいてもそれは積もつた雪のほんのチヨツピリの表面でしょう。そんなにたくさん雪を誰もどうすることもできません。本当にすごい雪が冬の間にひっきりなしに降り積もります。

何ということでしょう！そんな

なにすごい雪がいつのまにかなくなるのです。

どうして？

そうですね！春の力です！春が近づくと、ふもとの村からだんだん雪が減つていき、しまいはなくなつてしまひます。私のせいのたけの何倍も深い雪があつた山の雪も、どんどんかけ足でやつてくる春が消していくのです。それも、ただ消していくのではなくありません。消え残つた雪の形をいろいろなものに変えながら楽しむように消していまひます。最後に消え残る雪が馬の形になるのですよ！春の空に白い馬が浮かぶのです。これはペガサスです。そうすると雪国の山の村にもすっかり春がやつてきて、人々は、田んぼに植える苗などの準備を始めたり、いそがしくにぎやかになるのだそうです。すてきですね、そこらの小川の音が聞こえるような気がします。春をつれてくるペガサスのしるしの山が白馬岳です。春のペガサスの白馬岳は私の大好きなお話の一つです。

現場から
暮らしの風景

石毛 照子

雪が降りました。今年は二度も。たくさん降りました。

子どもたちは寒さに震え上がり、雪合戦や雪だるまに興じ、雪国の味をほんの少し味わいました。自然の威力に驚く姿も。

小さかつた冬の日、布団の中でグズグズの私も、雪の朝は飛び起きて、いつもと違う光や音に浮き立つ思ひだつたことが、鮮やかによみがえります。

雪の中できらめいて遊びまわり、雪にまみれて何度も着替える子どもに、叱ることなどはおろか微笑んでしまひます。

そんな雪の早朝。
イチツツイ ニイツ サン！
剣道の素振りのかけ声です。大人が「今日はいよいよ」などと言つても駆け出していきまひます。集団と継続の力を思ひます。

一年生の秋、鷹文が剣道をやりたいと言ひ出し、二年生になるまで朝六時の素振りを続けることができた、入れてもらえらうように話してあげるといふ約

束を、見事に守り、やり直し、去年の四月、晴れて大利根剣友会に入ることが出来たのです。その頃は、剣道着の紐の蝶結びが出来なくて、「やつて」と剣道具全部を抱えて私のところに持つてきていました。

ある時など、どうも様子が変だなりと見ていたら、何と袴の片方に両足をいれて最後まで練習をしてしまひ、「あれ！そうだった？」とケロリ。

いつのまにか剣道着を身につけることはもちろん、みんなと伍して練習が出来ようになりまひました。

先日、「今度の試合を見に来てよ」と自信あり氣に、ニコニコしながら誘つてくれました。「優勝したいな」と夢を見るようないい顔をして言ひます。

「優勝したらどうする？ね、一等賞になつたら、ねッ、」本当に、ニコニコいい顔なのです。優勝したい、一等になりたい氣持が伝わつてきます。そ

んなやる氣が嬉しく、その意氣込みが頼もしくも思ひます。

「だつて鷹文くんは一年もやつてないで、みんな強いんでしょ？」ほかの同じ学年の子より遅く始めたことでもあり、余り期待もできないまま出かけることを約束しまひました。

その日、思ひつきり力を出して頑張ればいいと心から思ひ北川辺町の会場に向かひました。試合が始まると、自分が出場しているかと思ひほど緊張し、力が入つてしまひます。

鷹文は頑張りました。一生懸命頑張りました。これだけ頑張れるんだ・・・こんなに頑張れるんなら・・・と思ひ胸が熱くなりました。

相手の面を打とうと必死で前に進み、前に倒れ込みながら戦ひました。技術面では私の目からも日が浅いのがわかります。「頑張り」で二人も勝ち抜き、一人に勝つと私の所にきて

「勝つたよ！一つ上れるって！」と報告してくれました。

一つ一つでいい。確実に階段を登つて行つてほしい。一氣に駆け上がらなくても・・・鷹文

はそんな子だと思ひます。頂上は何なのか、それがどこなのかは自分で決めるでしよう。最後まで頂上をめざし、あきらめないで頑張つてほしいと思ひます。「おれバカだもん、先生がそういつたもん」と言つていた入学の頃。今年も三学期の席替えで仙道家の加津子ちゃんに並び「バカ同士を並べたんだつて、先生がそう言つたよ」と訴えた鷹文でした。

「優勝したいな」と前のめりになつて戦ひ、歯を食いしばつて段級を登ろうと頑張る意欲は、剣友会の先生方のご指導のおかげ以外に心から感謝しながら、それにしても子どもたちの内にある伸びようとする力には驚いてしまひます。

伸びようとする力や可能性は、どんな子どもも持つていふことを「自然の威力」のように思ひます。それを見つつけ養ふことが教育であり、私たち養育者の使命なのだ、鷹文の頑張りにもう一度氣づかれました。

春です。全てのものの息吹く季節です。育ちゆく子どもたちに励まされながら・・・

現場から
輝きのかたち

池田 祐子

今年のお正月も私の担当の子どもたちは、それぞれの家族の暮らす「家」で迎えることが出来ました。

もう一昨年になりますが、漢子ちゃんのお祖父さんと連絡がまる五年ぶりについてから、お正月とお盆には二泊程度お泊まりにいくことが出来ています。

今度も大晦日の午後一志くんを迎えにきてくれたお父さんの車に私たちも同乗させていたただくことにして、秩父のお祖母さんたちの待つ「お家」に行くことになりました。

竹花保母のグループの残った子どもたちが「マクドナルドでおやつだよー、いくよー。」と呼びあっていました。

「漢子ちゃん、お祖父さんのおうちへお泊まりに行こう」と呼ぶと「行かない」と予期しない反応にびっくりして、「どうして？」しばらく考え、「お友だちと遊べないもん」

「帰ってからたくさん遊べるでしょう。お祖父さんもみんな待っているよ」と、何とか納得させてでかけました。

一志くんたちと別れ、乗った電車はすいていて「しりとり」などをしながらご機嫌でしたが、目的の駅に近くなると顔が曇り、「行きたくない。おうちへ帰りたい」とグズリはじめ、とうとうポロポロ泣き出します。駅に着いて、電話をしてお迎えを待つ間もシクシクポロポロ・・・

「いやだ。帰るの。お泊まりしない！」と訴えます。「お祖母さんち、またお泊まりしたいな。」などと話すことの多い日頃を思うと、こんなに嫌がるのはなぜなのか見当もつきません。これまでも、「おうちへ帰りたい」とグズツて、お祖母さんを困らせたこともあったと聞いてはいたのですが、これほどの拒否は初めてのことでした。

叔父と従姉妹に迎えられてお祖母さんが待つ家に着いて、上がつても、「帰りたい、お泊まりしない」とグズリはじめ、「電話したとき漢子ちゃんがほしいって言った本を買っておいたよ、ほら」とお祖母さん。「泊まって、明日になったらお祖母さんに、従姉妹の家に連れてつってもらいたいよ」とお祖父さんも。私も「いいな、漢子ちゃん。私も・・・」などなどだめですが頑として聞きません。とうとうギブアップ。電話して菅原先生に助けを求めました。漢子ちゃんも電話で話しますが、すぐもとへ戻ります。

○そのまま連れて帰ると今後のつながりが困難になる事などを考え、少々泣いてもお願いして帰る事にしました。「祐子さんが帰れば何とかありますよ」と言ってお祖父さんへ頼み、泣いて追う漢子ちゃんを振り切って帰りました。考えてみると、マクドナルドも魅力だったとは思いますが、しかし、時々、お泊まりに行くことが当たり前になったのはいいが、意識づけなどの導入を全くしていません。

お茶を頂きながら、従姉妹の一人がお祖父さんに抱かれ甘え、お祖父さんも嬉しそうで、可愛くて仕方がないようでした。

そうなんです！漢子ちゃんは生まれてからのまる五年間も乳児院で育ち、父母や家族などに抱かれて愛された経験などなかったのです。人に甘える事など光の子どもの家で初めて覚えたと言っているでしょう。だから頑張る事や身辺の自立などは上手ですが、甘え方などまだ下手で何となくこちがたないのです。

従姉妹の家にも行っても、ひとの甘えを見ていることが多かったのでしょう。辛かったでしょう。でもまだやり直し、学習できる年齢なのが救いなのです。お祖母さんともよく話し、しっかりと甘えることが出来るように・・・なろうね。

養護メモ 26

自立 その七 入野 隆の場合

菅原 哲男

夏休みの初めの七月下旬に父薩夫が三日間通ってきて、隆と宿題の工作などを楽しそうに一緒にした。八月初旬、祖母が、「お盆に孫たちを帰省させてほしい」と問い合わせてきた。

八月九日 訪問。父不在。○帰省中の子どもたちの生活は隣町に嫁いでいる薩夫の姉がきてくれるを確認。

○帰省中の生活は父との関係を中心にする。夜など父が不在にしないようにしてほしい。○子どもに関わる面倒な、苦手なことは、入所からこれまでほとんど薩夫でなく祖父母がしてきている。子どもの親である意識を持ち、少し責任を負わせる意味で、帰省などの話はなるべく父に直接相談するように。

などを祖父母と話し合い、後日薩夫とも何回か話し合って、三泊四日の帰省が実現した。帰省する日は、ほかの子どもとほとんど帰り始めたり、帰省できない者は保母と出かけたが、始

まったギリギリになって準備した。朝からソワソワしている。教会学校を終えて、約束の十二時ピッタリ父が迎えにきた。予定の日の予定の時間に元気に帰ってきた。

八月十六日 子どもたちの話から、この地方では有名な昨日の花火にも行かず、久しぶりのお友だちとも会わず、あまり出かけるなかつた。子どもが欲しいがと隆は父とカップラーメン、弟は階下で祖母とおそばなどという時もあつたようだが、「みんなで楽しい食事」という場面は少なかつたようだ。しかし、帰ってから生活のブレが殆どないのは、満足しての帰還なのだろう。(ケース記録)

隆たちの見えないところで大変な事件が起きていく。八月二十六日 薩夫来訪。祖父と些細なことではさかい昨日から家を出ている。もう帰らない。祖父と一緒にの仕事で出入りしている個人会社の社員になり社員

寮に住む話になっていると言う。一、親たちに心配かけず、話し合ってくださいとするように。二、子どもが親から離れて自立の要求が始まる思春期の前、遅くとも十才前が比較的スムーズな引き取りのメドで、その準備は引き続いて努力する。三、隆が帰省から帰って、六年生よりもっと早く家に帰り、仲良しの友だちと一緒に学校に行きたいと訴えた、このことが、今の学校での不適応の一番深いところでの原因と考えることを伝える。早く願いをかなえるために頑張るから、隆もお友達と一緒にになったときに恥ずかしくないように頑張る、今の学校にいくことが引け目や負い目にならないように励まして二学期を迎えさせよう。などを確認し子どもたちに対応してもらう。

何回か祖父母と薩夫との和解をはかるが薩夫が譲らず不調。九月二日 薩夫来訪。薩夫は祖父母に便利に安く使われたとの強い不信を表明。現在、前妻の路子のアパートで一一緒に暮らしている、路子の同意はまだだが、一緒にやり直すと自分から話す。

九月十五日 路子より電話。横浜博に子どもと行きたいと。七日前に「一切の関係を絶つ」と断言したのだが、やはり母かこれからの子どもとの関係をどのようにしていくのかを関係者で話し合っていくことを伝える。

農家の次男の祖父が家屋敷を分けてもらって分家独立し、祖母と世帯を持って十年余り実家にお礼奉公した。家業は丁稚奉公から始めて自立・自営をするまでになったものである。三十余年の忍苦と努力で一家を養い市の指定運送業者になるまでになったという、典型的な昭和一行生まれの農家の二・三男の生き方である。たくさん沢山の労苦を経験し、人には言えない辱めに耐えて社会的にも評価され自信を獲得してきた祖父は、二人の子ども・とりわけ長男の薩夫には「自分のしたような苦勞はさせない」ことを生きる目標にさえしてきたと言う。欲しくても手に入らず羨ましかつた思いをさせないために、欲しいと思う前に何でも買ひ与えて育てたのである。(この項続く)

日誌抄

八九年二月六日
九〇年二月一日

二月九日 女子学院より手作りのクリスマス・カードを、大利根剣友会坂東先生より竹刀をたくさん頂く。感謝。

十日 第二アドヴェント和戸教会の三和牧師による礼拝と楽しい夕食を。

十一日 この頃より栗橋の竹林、町内の石上、曾根各氏などをはじめとする物心両面での支えがたくさん。毎年の事ながら心温まる便りなども、励まされる。心から感謝。

十五日 年越やお正月を家族と過ごせたいと、訪問しての調整を。家族の迷惑にならない時間に、夜も昼も東奔西走。

十八日 九十年職員補充試験。原道小と冬休みの課題設定のための懇談を実施。

二十一日 町内東地区婦人会より

毎年のお支えを沢山。感謝。

二十二日 二学期修了。

二十三日 栗橋町ロータリークラブとボーイスカウトの共催で餅つき大会。ゴチソウサマ。

二十四日 クリスマス・イヴのキ

ヤンドル・サーヴィスを厳肅に美しくそしてメッセージも東大宮教会のキャロリングのキャラバンも合流して、すてきな一タ。夢見る頃サンタさんがプレゼントをどっさり。

二十五日 クリスマス。夕方五時半。お友だちやお父さんやお母さんなど家族など百人余りが会場にギッシリ。美味しいディナーの後、全員参加の礼拝としてページェント（深津文雄牧師脚本）を捧げ、誕生祝いを中心の祝会。久喜高校音楽部の素敵なおとも。

二十六日 加須市の梅沢三保氏より帰省できない子どもたちにとお年玉をたくさん。感謝。

二十九日 お正月を家族と過ごす楽しい嬉しい帰省始まる。帰れない子どもには松の内に家族においで頂きともに過ごすよう図り、それでもどうにもならなかった三名には外出や宿泊など特別の対応をした。

三十一日 年越し。剣友会では恒例の越年稽古。

一九九〇年一月一日 新しい年を全職員と残った子どもと第

もの家族などで元旦礼拝と第

一回目の食事を厳肅にそしてにぎやかに楽しく迎えることが出来ました。

四日 お正月気分をぶっとばし三学期も頑張ろう会。恒例になった北畑・荒巻両氏の腹話術とマジックショウも。

八日 剣友会寒稽古一三日まで。

一五日 春日部教会の我孫子さん、新しいスポーツ用品をたくさん。ありがとうございます。

二十七日 恒例の子どもと保育研究会の新年会。

二十九日 インフルエンザが蔓延。中学は学級閉鎖も。

年度を通して、特に年末年始には教会や団体・個人の多くの方々より沢山の暖かいお励みやお支えが寄せられました。

お名前を掲載し感謝を表すことを考えましたが、お名前の公表を望まない方も多くあり、今年度もこれまで通り施設長や職員が心を込めて感謝のお便りを差し上げてご了承を得たいと思います。概ねの動きはこの欄でお伝えできればと願っています。

新しい年度も子どもたちに負けないように励みます。（くら）

反射光

ものの芽を揺り
覚ます雨が武蔵
野の風景を濡ら

し、彩を濃くしていきます☆おかげさまで丸五年の歩みも終わりの見える処まで辿りつきました。これまでのお支えお励ましを心から感謝☆歳月を重ねても本当の子どもへのうめきVを聞き逃してしまうことがしばしばです☆子どもたちは八家Vでは弁慶のように大威張りが出るようになります。しかし、生い立ちに触れるような何かがあると、大きくなってもおねしよをしたり失禁さえ。八尺蠖や今日もあの子はおねしよしてV洋子☆一生懸命頑張つて子どもたちは暮らしを創ります。その暮らしを無遠慮に踏みこむのはいつも、お・と・な・☆時には想像力に欠けた学校教師☆そんな大人たちへの意義申し立てがおねしよなんて何と優しくささやかなことか☆そんな意義申し立てを見逃さず、彼らをあらゆる不利益から守り、同じ戦線から逃げないように新年度を迎えたい。ご支援を。更に！（哲）